

カオラマ

松原俊太郎

南に

入口

がある。

出口はわからない。

内と外を分かたつ、東西にのびる楕円形の壁には戦死者たちの生前の写真をもとに石膏でつくられた顔たちが所狭しと浮かんでいるが、時間の経過とともに目鼻口肌は剥がれ落ち、そのうえにはスプレーで落書きがなされている。その文字も幾重にも重ね書きされているので、判読できるものは少ない。入口の中央に立つ敗戦記念のモニュメントには白地に赤字で立ち入り禁止と書かれた看板がかかっている。

入口から入るとすぐに雑草に足をとられ、低木の枝と枝の手にかけられた鉄条網と高木の影によって行く手を阻まれる。かつての鮮やかな赤から黒に遷移しつつある血に染まった白衣を纏う医者がその隙間を縫って歩いてくる。誰によってかは知らないが、医者の足によって踏みならされてできた一本のこの散歩道は通称アフターケアと呼ばれている。医者は入口を見張りながら、胸元につけた極小のマイクで男と話す。男の声は医者の右耳につけられたイヤホンに届く。男の手は男から出ることばとともに動く。

医者 おい、そこにいるお前、苦情が殺到しているぞ。あの木には近寄れない、臭い、気味が悪い、木を私有化してるなどとお前の垂れ流しの糞みたいにだらだらとわたしに流れてきている。

男 糞を垂れ流す亡霊がいてもいいじゃないか。

医者 それも、もうだめになったんだ。

男 それで、お前は どう思うんだ。

医者 わたしはどちらもほうっておきたい。

男 じゃあ、ほうっておいてくれ。

医者 ほうっておいてくれないのが法なんだ。お前は例外じゃない、な。

男 な、なんだ。三分間、待ってくれ。からだを投げ出して通過してきたできごとをやつと、ここに持って帰ってこれそうなんだ。そうすれば顔もみんなも赦してくれる。赦してもらったところだからだは何の反応も示さないだろうが。が、それはなんといつてもこいつがこれまでこつこつと集めてきた大切な宝物なんだからね。それを分け与えるためにこ

の高い場所に長いあいだ、座っているんだ。ここで降りたらただの白痴のおじいちゃんになっちゃう。

医者 みんな、そう思ってる。大丈夫だ。跳べ！ 跳ぶんだよ！

男 跳べたらとっくの昔に跳んでる。

医者 跳べ！

男 黙れ。残念だ。あげられるものがないとは。あたたかみか？ やさしさか？ あげられないな。

医者 いいか、よく聞け。システム障害だ。自動壁が決壊して、どんどん別の人間たちが入ってくる。ここは安全じゃない。お前は移動したほうがいい。せつかくわたしたちがここで落ち着いてひとつのしごとができるように閉鎖空間にせず、外にパイプラインを通してちょうどいい循環のシステムを保っていたんだが、どうやらそれも不均衡に陥ったみたいで、入ってきてはならないものが出て行って、出ていくべきものが入ってくる。システムが人間的に矛盾をきたし始めた。からだたちは退屈し始めていて、お前は疲れきっている。システム人員を交代する時期だ。

男 自然に任せておけ。何もしない。(車椅子の車輪が軋みながら回る音がする)

医者 車輪を空転させるな。手に無理をさせて、何がしたいんだ？ お前の手が動きたびに作業効率が落ちる。

男 まだ動く。いや、動けない。からだは洪水に根こそぎ流され、過去とは訣別した形となって頭の下に戻った。だから、からだたちを動かす。子どもたちの口には幻想でいっぱい、の飴玉をつめこめ、大人たちのケツには安心を注入しろ。からだたちは動かしてくれ。この檻縷肉を動かせるのは…

医者 動かしようにもその手はもう失われた。早く忘れてくれ。

男 その手を忘れれば、からだたちはもう動くこともなくなるだろう。

医者 何も全部を忘れることはない。部分的忘却でいいんだ。からだたちを動かして、壊れたものを修繕して、新しいものにつくり変えていけば、また何かが生まれてくる。

男 忘却が新しさをつくりだす、残るのは、古いものだけだ。ここは最後の場所だ。最後の映画が始まり終わる場所だ。

医者 ここには壊れたものが運び込まれ、お前の指示のもと、からだたちと機械は壊れたものを修理し、外に排出する、修理場として機能している。だが、お前の中から引きずられてお前の心が壊れてしまえば、からだたちのあいだで相対的に保たれていた力関係が

壊れ、機械の有機的な運動が壊れ始め、壊れたものが修理されないまま外に出されて、外だけでまわっていたシステムも壊れ始める。お前のからだが無機的になったように、何もかもが狂っていて、これまでここには来るはずじゃなかったものまで来始める。お前以外の指令に慣れていないからだたちは困惑するだろう。より多くの視線と指令に惑わされて、いずれ異常をきたすだろう。

男 そうならないシステムはない。善処。からだたちが動く。

医者 からだの数が増えるとお前の負担も増える。

男 何人でも構わない。からだたちがそれを望むのであれば。言ってやってくれ、見栄えを気にするんだったらやめたほうがいい。金が欲しいもだめだ。ただ、からだを思う存分、動かしたい、これだったらオーケーだ、と。

医者 わかってるよ。

医者は入口に背を向け、メガホンで人びとに挨拶をする。

やってきた人たち

は入口に立ち並んでじっと医者の中を見つめる。

医者 みなさん、ここは立ち入り禁止ですよ。

何も聞こえていない沈黙。

医者 この土地の所有者はわたしであり、ここは私有地です。何か催しものがあれば、招待状を差し上げますので、そのときにはぜひいらっしゃってください。ですが、今日は特に何もありません。怪しいこともありません。みなさんに危害を与えるようなことは画策しておりません。どのような噂が立っているか、わたしには皆目、見当もつきませんが、わたしたちはただわたしたちの家を再建しているだけなのです。

何かを思い出そうとする沈黙。

医者 承知しました。ようこそ、おいでくださいました。ここはどこからも干渉されない

緩衝地帯であり、どこでもない場所であり、正常なものにはなにも一つありません。ここは時空が歪んでおり、いま、みなさんの時計は八時三十三分を指しておられるかと思いますが、ここの時計は二時四十五分です。冗談です、ここでは時計がまったく役に立ちません。可逆的な時間が流れており、明日にはわたしのこのふさふさの髪も抜け落ち、肌も皺皺、腰が九〇度折れ曲がっている可能性だってあります。溶けて、固まって、爆発して：みなさんがここに入って、留まってしまえば、次の瞬間にはみなさんのからだが変わし始めるでしょう。恐ろしいのはその変化に気づかないこと：そんなことをお望みですか？ちよっと足を突っ込んで、湯をかき回して、心地よい温度を楽しんで、さっぱりして帰るなんてことはできないのです。ここは一個の脳のような場所で、過去のリンボと、予測する未来と、渦を巻いてやまない現在がいっしょくたに詰め込まれています。溶けて、固まって、爆発して：一個の脳をぐじゃぐじゃにするのは簡単なことです。みなさんのからだの各部分が統合されてちゃんと機能しているうちにおかえりください。

何も思い出せなかった沈黙。

医者 番犬と追いかけてこしますか？ ここにいられては困るのです：それともなか、もしかして、まさか、わたしたちのお手伝いをしてくれるのですか？ そうです、わたしたちは家をつくっているのです。これまでにはない大きな家を、もう二度と壊れない家を、誰もが自由に出入りできる家を、です。ただ、お礼はできません。見栄えが良くなることもありません。健康も約束できません。ただ、からだを思う存分、動かすことはできます。

考えている沈黙。

医者 了解いたしました。またのちほど、ご連絡を差し上げます。ひとまず、おかえりください。それでは。

抗議あるいは偵察、調査をしにやってきた人は、いまだ黙ってその場に留まってい

る。一個の脳、どこでもない場所

の侵入者となったやってきた人たちは当然のことだが、外で与えられていた自由をここでは行使することができない。が、からだは解放される。

医者のはのけぞって、やってきた人たちの滞留と接近をまのあたりにして、首をふりふりしながら頭を元の位置に戻し、男に電信を送る。

医者 どうして帰してやらないんだ。

男 せっかく来てくれたのだから、歓待する。

医者 誰もそんなことは求めていない。

男 からだは感覚したものを正直に反映する。かれらは留まった。もう振り返らない。

医者 お前がそうさせたんだろう。

男 帰る場所があるのはしあわせかな？

医者 当然だ。家に帰ること以上にいいことはない。

男 みんな無垢でありたいと思っていた戦時中の話だ。いまは孤独と軋轢と沈黙が待っているだけだ。

医者 わたしがいないと存在しないわたしの空間が待っているんだよ。ペット、旦那、奥さん、子ども、人形、慣れ親しんだものたち、楽しいドラマ、待っているものはたくさんあるんだ。鬱々としたお前のひがみにはもううんざりだ。

男 羨望を持ってたらこのからでも動くだろう。だったら、帰ればいい。かれらは留まった。

医者 だからお前がそうさせたんだろう。数が増えるとそれだけ齟齬も増える。齟齬はけっして悪いものではないが、増えると厄介だ。

男 けんかも血と憎悪と無効なつまらない文句さえ流れなけりやおもしろい。齟齬するものたちがここにあるものとことを解放するんだ。

医者が鉄条網に手をかけて戻ろうとすると、医者背後に、

顔が現れ、

微笑む。

医者頭の半分ほどの大きさ、茶色い髪が顔の両側から重力に従って垂れ、顔の終わる地

点である首からは一本の白い糸が伸びている。

顔 おはよう、こんにちは、こんばんは、さようなら、ここはどんな時期？ ねえ、わたしに教えてくれない？ わたしたちの花園へ、ようこそ。よく来てくれましたね。どう？ この芝生、あのからだ、そしてこの顔…

医者 ああ、またやってきたのか。

顔 わたしはまがいもの、すぐに消えるから。

医者 わたしには確かめようがない。

顔 わたしは嘘をつかない。

医者 わたしには確かめようがない。

顔 じゃあ、黙っててね。

医者 いったい何を考えているんだ。

顔 自分で考えて。なにか間違いがあったらすぐに修繕して。

医者 わたしはあなたのからだを…

顔 そう、からだたちは今日も元気に動きまわって。見えますか？ 両目でちゃんと見てね。話しかけてもいいけど、たぶん望ましい返答は望めないと思う。わたしはことば、かれらからだを持っている。かれらの肉はあなたたちの手の中に巻き込んでしまうかもしれないので、注意してね。こちらが、そう、これが適当な距離、と思ってもかれらの適当な距離とは違うんだから。せつかく来てくれたのに、ごめんなさい。でも、ここは見学の庭じゃなくて闘技場で、戦場といってもいいほど苛烈な争いが行われる場所なの。わたしはそこから離れて宙に浮いているけど、いつなるとき、この紐のようなもの、これがわたしのからだの最後の抵抗の残りものなんだけど、これを引っぱられて巻き込まれてしまいかわからないし、けっして、安全な場所でもくそ笑む神といった存在じゃない。もはやわたしの花園とは言えないわね。ここはわたしのコントロール下にはありません。責任者はあなた。からだたちはこの限界をよく知っています。何度も境界線にアタックして、そのたびに傷だらけになって帰ってきますから。何ならあなたたちがこの所有者であり、未来の責任者であるのかもしれない。

やってきた人たちがどよめく。医者はじっと背を向けて佇んだままにいる。

顔 それでもわたしはわたしなりに、あまりにも無用で、役立たずで、わからずやのからだをことばに収斂、分節させることに成功した。話しているのはわたしの脳ではなく顔で、わたしの喉が震え、口が開き、目もそれに応じて開閉して、ことばが出てくる。わたしが声を出さなくてもこの顔を見てもらえれば何かしらのことは伝わる、あなたたちと同じメカニズムね、わたしはあなたたちと同じ人間ということでもよろしいでしょうか。ああ、どうでもいいの、わたしが人間かどうかなんてね、わたしだって父の精子が必死に泳いで泳いで母の卵子に辿り着いてできた卵から生まれた子どもなんだから、戸籍だってある、開示なんかしないけどね、生きているのかさえ定かでもないんだから！ そうそう、からだはどこに行ったか、ね。わたしの手がわたしの手で、わたしの足がわたしの足。同語反復じゃなくて、わたしの手ということばが、わたしの手、になった！ ということ。わたしの手はあなたの腕を掴む、ということばがあるとすると、もう、いま、すでにわたしの手はあなたの腕を掴んでいるの。文字どおり、あなたはわたしの手に掴まれている。もちろん目には見えないけど、わたしのことばは血肉を持っている。それはあなたたちにとっても同じこと？ 誰か、わたしにことばをプレゼントしてくれない？ わたしとあなたとあなたとわたし、ユーアンドミーの構文で、わたしの腕はあなたのからだを抱きしめる、といったように。そう、だから、わたしを殺すのは簡単。わたしに、死ぬ、殺す、醜い、だから壊す、気持ち悪い、などなど罵詈雑言を浴びせつけなければいいの。ことばがからだを持ってしまった以上、仕方がない。たかがことば、とはもはや言えない状況になってしまいました。わたしは考えたわ、どうしてそのようなことば、わたしを殺すためのことばが存在するのか。自らの感情や感覚を表現するのにそんなことばが本当に必要なのか。無駄に人を傷つけるための無駄な活用なんじゃないのか。

医者 （肩をすくめて）メタフィジカル・セックスですよ。誰でも楽しむことができます。

顔 メタなんて言ってるからからだを取り逃すのよ。空疎なことばで名づけてはっかりで、大事なものはいつも欠如、お医者さんならその腫瘍を取り出して患者さんに見せてやらないと誰も納得しないでしょう？

医者 そうだな、からだがないセックスなんて何にも楽しくない。でも、しあわせにはなれるかもしれない。くそくらえだが。

顔 たくさん人がいるんだから、ひとりごとはやめてね。ことばはもっと大事に使わないとだめ。いい、わたしとあなたは上下運動するエレベーターのなかで宙吊りになって見つ

め合っている。わたしはエレベーターのなかを重力に翻弄されながら泳いで、人差し指があなたの右肩に到達する。エレベーターが止まる。わたしはあなたを抱きしめる。エレベーターが下降を始めてからだに重力から解放される。手が背中に食い込みあって、あなたのシャツの襞をぎゅっと握りしめて、また離す。皺になるかどうかなんてもう頭にない。頭にあるのはふれあった肉と肉だけ。エレベーターが急に上昇を始めて、肺が締めつけられる。ボタンを外す。静かに、息を潜めて。ホックが外れると、あなたはからだをこごめ、恥ずかしそうに俯く。わたしは額に額をあてて、顔を起こし、あなたの唇に近づく。やわらかい唇と薄い唇が触れてあなたのからだが一瞬こごり、口がほんの少し開く。わたしの息と外の空気と声があるあなたの喉の奥を震わせ、いっしょになって中へ入っていく、あなたの血液と混じり合って全身を駆けめぐる。からだになかから温まって、ぶくぶくと膨らんでいく。わたしはそのぶくぶく肉のなかにもぐりこむ。

医者 三文官能小説を読んでる気分だ。

顔 想像力がないのね。想像する前から何かを決めつけて、安全を守り抜く。ねえ、楽しい？

医者 不愉快だ。

顔 からだたちは楽しそうに動き回ってるわね。あなたもからだを動かしたらいい。

医者 あなたに会うと、すべてがどうでもよくなってしまふ。どうしてだ。

顔 それはわたしにからだがないから。それがうらやましいんでしょう。

医者 普通は逆だな。あなたはおれのからだがうらやましくないのか。

顔 たるんだお腹に支配されたからだなんて誰がうらやましがるの。

医者 そうか、あなたは女だった。細くて長い脚、くびれた腹、ほどよい大きさの形のいい胸、狭い肩幅、細い首、どうだ、欲しくないか？

顔 いらぬ。前に持ってたから、もういらぬ。あなたのからだもいずれなくなるのよ。

医者 そうか、そうだった。

顔 みんな、影に隠れちゃった。

医者 顔を見るのは初めてだろうからな。恐いんだ。生首なら晒し首のちらしやらサロメの絵で見たことがあるだろうが、生首とはまた違うからな。なんていうか、あなたのは頭とか首じゃなくてやっぱ顔で、懐かしい。わたしもかつては顔を持っていたような気がする。

顔 鏡を見ればすぐそこにあるわ。

医者 鏡のなかにはわたしの顔とは言いがたいものしかない。別にわたしの顔だと認めてあげてもいいが、顔だってそんなことは求めやしない。わたしの顔は社会がつくりあげたものだし、これまで通り過ぎてきた風景のハンマーが打撃を加えて変形したものだ。もはや誰の顔でもない。

顔 それで、わたしにはわたしの顔があるっていうの？

医者 そう、誰にも変えられない、あなただけの顔だ。

顔 別に嬉しくない。だって、わたしの顔なんだから。

医者 誰もが羨む、わたしの顔だよ。

顔 何か欲しいの？ わたしには何もあげるものなんてない。ただ人を怯えさせるだけ。もう消えてなくなってしまうほうがいいの。

医者 あの男は悲しむだろうな。

顔 忘れてた。あの人はどうしてるの？

医者 いつもどおりの労働だよ。

顔 また一日が始まったのね！

顔が茂みのなかに消える。やってきた人たちが影から出てくる。

医者が駆け足でアフターケアを抜けると、視界が開けて、青々とした芝生が広がっている。四方を囲む白樺の木から木には黒いコードがかけられており、たくさんの電球が吊られている。医者は東のロープに沿って、ひそひそ声のなかを通り抜ける。医者が向かった北側には、二本の楓の木に架けられた

棒から吊り下がった

車椅子にひとりの男

が座っている。地面からの高さはおよそ三メートル。男は頭を重力に任せてうなだれており、微動だにしない。男の口には酸素マスクが装着されており、右手には赤い風船、点滴袋が頭上の棒にハンガーで吊られており、そこから伸びたカテーテルが男の左腕に刺さっており、肛門と尿道にも突き刺さったカテーテルからは排泄物が時折、地面のうえに滴り落ちる。男が突如として顔を上げる。顔は現れていない。男は顔を下ろす。

顔　ねえ、そろそろ何か言ったらどう？

男は顔を上げる。顔はない。顔の声の出所は不明だが、顔の声は耳を傾ける者の耳元で聞こえる。耳を傾けない者には息の音すら聞こえない。

男　素晴らしい。声が聞こえる。奇跡だ。

顔　きょうもいいお天気よ。ねえ、きょうも何も見えないの？　きょうも何も言えないの？　いいえ、何か言えることはわかっている。あなたはまだ声を出すことができる。声を出すことができなくても眼をあける、耳をすます、口をあけることはできるってこと、わたしは知ってるのよ。毎日していたように、わたしにささやいて。それで十分。あなたの声、あなたが胸底からほじくりだしたことば、わたしにしか意味の通じないことば、微笑まずにはいられない、あなたのおかしな言い方…　沈黙は涙の肴にはならないのよ。ゴムの木にでもなったつもり？　たまに光の射すを見て、聞いて、浴びて、塩を舐める観照植物…　違う、あなたはおしゃべりだったしいまもそう、わたしがうんざりするぐらいわたしのなかに隠れた宝物を見つけてそれをことばにする、そんなことばたちがあなたの喉にたっぷり詰まっている。おねがいだから自分を責め苛まないで、自己批判なんて時代遅れもいいところよ、疲労の重ね塗りはもうしなくていい、ねえ、わたしの声が聞こえないの？

医者　聞こえてるさ。何を言えればいいのか考えてるんだ。

顔　首をつっこまないで。あなたたちに何がわかるの？

医者は首をすくめる。

顔　でも、あなたたちに聞こえてるってことはわたしの声は頭のなかだけで鳴っているわけではないということね。よかった。どこにいるんだろう、わたし。出たり入ったり、現れたり消えたりをくりかえしたせいで、よくわからなくなっちゃった。いいわね、からだたちは。お庭をかけずり回って、とっても楽しそう。やってきた人たちは無ね、何も返してくれない。不幸は我慢しちゃだめなのに。尿意以外何も我慢することなんてないのに。わたしのことばが理解できないのかな。無視してるだけなのかな。ねえ、どうしてかれらはここにいるの？　もっと別の、だだっ広い、海に見える丘で遊んで、崖から身を投げればいいのに。

医者 あなたが退屈するだろうと思つてさ。

顔 嘘。トーンが低いわ。まあいい、あなたが話せないんだつたら、あなたたちが話すほかないものね。あなたたちは交換可能で、からだのないわたしは交換できないなんて皮肉な話よ。まったく。でもね、からだたちがいるせいで、わたしにからだがないことが余計に強調されちゃうじゃない。

医者 気にすることない、顔は素晴らしい。顔を見るたびに、神々の存在について考えざるをえない。さあ、顔を見せてくれ。

顔 だからそれはまがいものだって言ってるじゃない。ラッセンのイルカみたいなものよ。もうあれは用なし。あなたが見つ付けてくれないとだめなの。わたしはこの顔を持って余さないように話す。からだたちはからだを持って余さないように動きまわる。あなたたちは何もしないの？

医者 動きまわっているのが見えないのか？ 何もしないのはあの男だ、設計図を頭の上に隠している、それだけで何もしなくていいと思つている。わたしはもうへとへとで、もはや顔を上げて、顔を見る気力もない。

顔 顔も見てもらえないなんて、わたしがどうやってどこにいるのかわからなくなってしまふじゃない。あなたがわたしを見て、わたしはようやく存在するの。声だけじゃどこにどうやってわたしがいるか、わからないでしょう。わたしはそんなふふわした存在にはなりたくないのよ。ごめんなさいね、わがままを言つて。でも、あなたはたしかにそこにいる。からだたちと同じように。

男は芝生に目をやる。

男 動いて止まらない、豊かな顔。美しい、恐ろしい、顔。目を瞑ろう。何も見えない。壊された顔。何かは聞こえる。あなたの声。思い出してくれ。耳を閉じる。わたしの声。口を閉じる。

顔 やつと話したと思つたらこれだもの。あなたが思い出して話してくれなきゃ、わたしはからっぽになってしまう。わたしが話すことはあなたに関係のあることしかないのだから、あなたがわたしの目の中にいるか、わたしの声に応答するか、してくれないと、わたしにはもう何も話すことがない。からだがないわたしは何だつて話せるんだけど、それじゃ、わたしの口はしゃべりすぎてしおしおになつてしまふし、独り言は、嫌なの。ねえ、

何を思い出せばいいの？

男は左手人差し指で地面を指さし、右手で風船の紐をひっぱる。

顔 わたしが地面から離れた日のこと。それがわかればねえ、何か手だてがあるんだろうけど。あなたのほうが詳しいでしょ。目撃者は数人いたんでしょう？ 話、聞いてくれた？ 先生、実際、何がどうなったんですか。わたしには思い出すことはありません。わたしの頭は思い出そうとして思い出せるようにはなっていないんです。（男は首を縦と横と斜めに激しく振る）問題がなければ何も出てこない。わざわざ問題をつくる必要もない。

医者 わたしには何も無い。使われて、使い古されて、捨てられて、地面に横倒れになって、そのまま死んでいくだけだ。わたしは彼女にも彼にも何の関係もない。

顔 ねえ、いつからそんな嘘つきになったのよ。あなたたちがわたしを救ってくれたんでしょ？ 本当は、そうじゃないの？ わたしには本当のことをたしかめる術もないのだから、嘘はつかないで。

医者 悪かった。ひとりで死ぬって言えば責任を逃れられると思ったんだ。いまわかった、みんなひとりで死ぬんだから、そのレトリックはわたしのからだ以上に使いものにならない。

顔 さあ、今日こそ、わたしのからだがだめになったときのことを教えて。誰も思い出ししてくれないじゃ、わたしのからだはどこかの海に浮かんだままよ。

医者 お前が言うべきだよ。

男はうなだれようとする首を椅子の背に預け、目を上下左右に動かし、顔を探す。

男 どこにも見えない。顔。

顔 わたしはどこにだっているわ。

男 そう、そうだった。かつては。死体工場から帰るとき、電車の中のつり革で首を吊っているとき、玄関の冷たいタイルに靴を投げつけるとき、家で冷めた肉じゃがを食べているとき、枕に突っ伏したとき、そして朝、目覚めたとき、顔はすぐそこにあった。けっして目を離さなかった。すぐに消えてしまうことはわかっていた。顔のいない風景はどこにもなかった。あなたがわたしのからだにマウントしていたのか、わたしがそうしていたの

か、いまとなってはわからないが、楽しかった。からだのいたるところにわたしのものではない異物が挿入されていたというのに、それも忘れて、ただただ楽しかった。しあわせだったかどうかはわからない、何がしあわせだったかなんてとても。しあわせはわたしのものでもあなたのものでもない、わたしにとってのあなたはしあわせだったかもしれない。あなたにとってのわたしもしあわせだったらよかっただろう、しあわせが何かもわかっていないのに、くそいまましいま残っているのはしあわせの代償だけだ。

顔 どうしてなの？ どうしてわたしたちは同じしあわせな一日をつづけられなくなったの？

男 あなたにはからだがあつて、顔とからだは密接に絡み合っていた。あなたの胸はあなたの目と、あなたの足はあなたの口と、あなたの髪の毛はあなたの手と絡み合っていた。その組合せは会うたびに変わっていて、退屈とは無縁だったよ、ありがとう。でも、あなたは退屈していたね。わたしのからだは動けなくなるあいだに鬱屈して、屈折して、何が何だかわからなくなってしまつて、愛するからだは解体されてしまつた。

顔 それで、わたしには顔だけが残つた。

医者 その顔もいまや見えない。

医者は南下し、芝生平面中央に見回りにむかう。やってきた人たちは芝生平面の周縁で、思い思いの姿勢で芝生に横になり、空、横転した木、芝生のぎざぎざ、そのうえに横たわる別の人などを眺めている。芝生平面中央には一軒の潰れた建物、ひっくり返されたベンチ、掘り起こされた土、立方体の鉄枠、三つのバスターム、八本の丸太、散乱する鉄屑と木材、蒸気をたてるプラントがある。上空には薄い靄がかかっており、芝生は円形に光る部分と影の部分、その隙間は仄暗い灰色の光が覆っている。そしてその平面上には、

三人の

頭とからだを持つ

からだたち

フリッツ、ウィリー、ゴンゾーがからだを密接にくっつけ、ひそひそ声をかけあいながら、潰れた家からものを運び出し、選別する。それが終わると、大きな袋、シャベル、トンカチ、釘、鑿、ねじ錐、斧、鋸、鉋などを掴んでは投げ合い、丸太を切り、組みあわせ

る。立方体の鉄棒を組合せた丸太のなかに入れ、三人はそのなかに入って殴り合い、石を鉄棒に沿って積み上げていく。

医者 お前たちは働きすぎだ。少し休んだほうがいい。

ウィリー 何も聞こえないね。(フリッツの目を両手で覆う、以降そのまま)

フリッツ 聞こえないふりをしろ。(ゴンゾーの耳を両手で覆う、以降そのまま)

ゴンゾー 何も聞こえない。(ウィリーの耳を両手で覆う、以降そのまま)

顔 あなたたちはいったい何を考えているの？

医者 お前の顔を食べたい。

顔 どうしてそんなことするの？

医者 お前の顔が美しいからだ。

顔 じゃあ、ずっと眺めていればいいじゃない？ 無害で、無垢で、無実な顔を壊しても

自分のものにはならないのよ。

医者 わたしもずっとそう言っているんだが、かれらは何ひとつ理解しない。

顔 じゃあ、かれらがわたしを食べるのかもわからない。嘘つき。

医者 行動、身ぶり、仕草を見て解読した結果だよ。ひとは顔を眺めているだけじゃ満足できない。それは二〇世紀が証明した事実だ。あなたはめつたに顔を見せてくれない。それなら、あなたを捕まえて、閉じこめてしまおう。世界を支配するのは短絡なんだ。

顔 まあ、いいわ。どうせ、捕まらない。まがいものを掴んで食べて食中毒にでもなるがいいわ。わたしにむかしあった目に合わせてもトラウマはなくなるし、そんなトラウマは存在しないと思っ込んでいるし、万が一、捕まえてもとってもひどい目に合うだけよ。顔は恐ろしいってことを思い知らせてやらないといけないのね。美しくてきれいな顔なんて絵画と写真向きの幻想なのよ。

屑鉄に覆われたベルがけたたましい音を立て、屑鉄が振動し、耳障りな音を立てる。男はからだたちをしごとから解放する。

インターバル

をむかえ、からだたちは思い思いにからだを伸ばし、縮め、また伸ばして空気をたくさん

胸に取り込み、大きな声を出してみる。大きな声が出て、歓声を上げ、ペットボトル水をあたりにぶちまける。黒円のもとに木片と紙片を集め、火をつける。男とからだたちの中間にいる医者がからだたちに青いビニール袋を与える。ウィリーが袋に顔をつっこみ、中身を漁る。

ウィリー 今日 是椎骨、太もも、ハツだ。

フリッツ 恥骨はないのか。

ゴンゾー 悪くない。

フリッツ 恥骨はないのか。

ゴンゾー 黙って焼いて喰え。

ウィリーが大腿の骨と肉とハツを金網に乗せ、3人で焼く。脂が灰色の空のもと爆ぜる。3人はもぐもぐと肉とハツを頬張り、骨にしゃぶりつきながら声を出す。

ウィリー 風当たりつおいな。

フリッツ いつもいつも。もう慣れた。

ゴンゾー 機嫌が斜め下なんだね。

フリッツ いつもいつも。

ウィリー そのいつもってのはいくくない。

フリッツ いつもしあわせ。

ウィリー 地獄の真ん中だ。

ゴンゾー こいつの頭んなかは霧がかかっていて白夜な。

ウィリー お前の何がわかる。

ゴンゾー 頭んなかが白夜で、灰色だ。

ウィリー おれの頭は空で、そして、お前も空で、お前も空で一切が空だ。アレフの頭だけが灰色のぶつでいっぱいだ。

フリッツ いつも変わらない。

ウィリー アレフと違ってからだだがピストンするから、世界が動いている。わかるか？

世界は動いている、でも止まってりや止まってる、人間は馬鹿だからな、動かないとわかへんのや。アレフの世界は永遠の一時停止で、あれが有名な地獄の下の下だ。

ゴンゾー 引っぱりあげるか？ 突き落とすか？

ウィリー それは花が決めることだ。

ゴンゾー おれたちにだってできる。

ウィリー アレフがごめんって言うよ。

フリッツ アレフはいつも何を考えているんだろうな。

ゴンゾー アレフは考える男の真似して椅子に座って丸まってるけどな、本当は何にも考えちゃいないんだ。

ウィリー 逆逆、からだが無も考えてないんで、離れたからだは動いているってことはアレフの頭は何かしら考えてるんだ。

フリッツ からだのことを考えてくれてるのか。なんていいやつなんだ、アレフの犠牲がおれたちのエンジンなんだ！

ゴンゾー あの頭の中にあるのはフラワーアレンジメントだけだ。

ウィリー たしかに。ここは花園だ。

ゴンゾー ここは地獄だ。

フリッツ ここは収容所だ。

ウィリー ここは庭だ。

ゴンゾー ここはユートピアだ。

フリッツ ここはベッドだ。

ウィリー ここはたくさんだな。

ゴンゾー たくさんはいいことだ。

フリッツ すくないはだめだ。ハツが少ない！

ゴンゾー もうぜんぶ喰っちゃった。見つけてないだけですくないなんてないんだって。

ウィリーは煙草を巻き、火をつけ、一吸いしてふたりに回す。

ゴンゾー チルチルミチルだな。

ウィリー ああ、世界の束の間の付け足しだ。

フリッツ 動かなくていいのが気持ちいいのもからだは動いているからだ。

煙草を吸い終わると、からだたちは芝生平面を反時計回りに散歩する。

ウィリー ユリイカ！

フリッツ なにを？

ゴンゾー 花なんだな。

ウィリー (花を貪り喰う) お前はまだ見つけていないのか。

フリッツ いらんし。

ウィリー すねるな。めんどうだ。

フリッツ かわいそうに。やさしい花。

ウィリー 本当に。あのやさしさだけが救いだった。

ゴンゾー 口まで労働に汚染されちゃったね。もうしゃべりじまいだ。

フリッツ もうすこしで声が出なくなるところだった。

ゴンゾー 同情するからだ、一瞬のスキで喉を突かれる。

フリッツ 心がない、お前たちにはハツしかないんだ。

ウィリー 花のことなんて気にすると思うか？ お前にしか関係がないのに？

ゴンゾー あいだにあるのは薄くて吹けば消え去る儂い綿毛だけだ。すぐに忘れる。

からだたちは横になった人たちを発見する。

ウィリー ここにハツがたくさんあるぞ。

フリッツ まだ食事は終わってなかったのか。

ゴンゾー もう散歩しちゃったじゃないか。

ウィリー いつのまにか食べものが増えたんだ。

フリッツ でも、怒られるんじゃないかな。

ウィリー 誰が怒るんだ。

ゴンゾー まあ、怒られるだろうな。

ウィリー じゃあ、だめだ。ほうっておけ。

フリッツは芝生をちぎって、横になった人たちにふりかける。

ウィリー だめだ、だめだ、明日たくさん食べられるから、だめだ。

フリッツ 虫たちが食べちゃうんじゃないかな。

ゴンゾー すべては共生だよ。

フリッツ 虫酸が走るね。

ゴンゾー 消化が進むな。

ウイリー そろそろ休憩終わるぞ。

ゴンゾー いったって休憩みたいなもんだ。

ウイリー そりゃあいい。

フリッツ 何も考えなくてすむ。

ウイリー ああ、今日も何もなかった。

フリッツ 音楽でも聴くか。

ゴンゾー 昨日、聴いた。今日は聴きたくないね。

フリッツ 何か聞こえるか？

ウイリー いつものくちやくちやおしゃべりだな。

ゴンゾー アレフの声だけが聞こえる。

ウイリー からだがなければ何だって言えるからな。

フリッツ ずっと話してて嫌にならないのかな。

ゴンゾー 沈黙したらそれこそ自分が何なのかわからなくなって発狂しちゃうだろう。

フリッツ おれたちにはからだはあるけど、それほかには何も無い。

ウイリー しごともない。

フリッツ しごとはある。

ウイリー やりたくないんだ。いや、やりたいと思えるほど元気がない。そんな力が無い。

ゴンゾー でも、生きてる。たいへんな元気じゃないか。

ウイリー 生きるのが大変だからしごとに回す元気がないんだ。

フリッツ けつに一撃お見舞いしてやるよ。

ウイリー ああ、思う存分、やってくれ。

ゴンゾー 他人の施しは魚の骨だ。喉に引っかかってとれない。自分のために働け！

フリッツ 汗は愛と自分のために流せ！

ウイリー やっぱりお前たちには蹴られたくない。

ゴンゾー じゃあ誰ならいいんだ。

ウィリー 満島ひかりかな。あつ、やめろ、蹴るな！

フリッツ ふざけたことを言っていると蹴られるんだよ。

ウィリー じゃあ、お前ももつとふざけたことを言え。

ゴンゾー 考えてみたことはないか。アレフの脳をぶち壊せば、このからだはもつと自由に動き回れるって。

フリッツ 考えない。考えないから存在しない。存在しない自由がある。

ウィリー でも、からだはここにある。

フリッツ からだは誰のものでもない。これ以上の自由はない。

フリッツは立ち上がり、インターバルが終わる。フリッツは自由からだを動かす。ウィリーとゴンゾーもそれにならって自由に動く。

顔 ねえ、なんだか楽しそうね。

フリッツ おお、花だ。

ゴンゾー 今日もきれいなさえずりだ。

顔 ありがとう。楽しい？

フリッツ 自由の方法を見つけた。

ウィリー 自由に飛びまわって、歩きまわって。

ゴンゾー 楽しい。

顔 いいわね。わたしはすべてが終わる夜、家で薪ストーブの前に置かれた揺り椅子に座ってウイトゲンシュタインを読んでうとうとする、そんなことももうできないのよ。あなたたちはなんでもできるのね。

ゴンゾー 何が楽しいのかさっぱりわからないね。

フリッツ 動いているほうが楽しいよ。

ウィリー 止まる楽しみもあるだろう。

ゴンゾー そうか、じゃあ止まろう。

ウィリー やっぱ楽しくない。アレフはちっとも楽しそうじゃないしな。

ゴンゾー アレフは動きたくても動けないからな。止まりたくて止まっているわけじゃない。い。

フリッツ でも、どうしたんだ、いったい。

顔 わたしはあなたたちひとりひとりの懐かしくやさしい顔として、黙って微笑んでいたほうがいいのだろうけど、もう黙っていられないの。写真に写る懐かしい顔は慰めにはならない。かつてそこにあった、ということだけを示して、あとは自分の顔が好きなように消費されるのをじっと見つめているだけ。顔のない人たちは自分の顔を探している。あなたたちはその姿なき探索を見ようとはしない。わたしは地面に横たわって踏みつけられ、木に縛られて鞭打たれ、鉄の鎖で逆さ吊りにされ、火炙りにされ、唾を吐き捨てられ、ひどいことばを呑みこまされ、それでも顔を持っている。顔がどこまでもついてまわる。あなたがいるから。あなたがいなくなれば、わたしもいなくなる。先のことはわからないわ、あなたを殺してみる実験もできないんだし。あなたたちがここで自由に動きまわられるように、わたしがこうして声を出しているのは、あなたがいるから。語りかける誰かがいないことほど悲しいことはないもの。わたしはひとりでは発見されない。わたしを見つめる人がいて、ようやくわたしはここにいらることが出来る。そして、あなたはわたしを自在に殺すことができる。あなたは人間で、あまりに人間的に疲れていて、身動きがとれないままわたしにやさしくする。わたしよりやさしい人間はごまんという、だが、わたし以上にあなたにやさしくすることが出来る人間はどこにもいない…これがあなたの殺し文句。笑っちゃだめ、あなたはいつだって真剣で、わたしがいつも目の前にある、それゆえに疲れきっているんだから。本当はあなたも顔だけになればいいのって思う。顔を前にしたからだなんて何の役にも立たないんだもの。でも、それはどうしてもできないみたい。わたしにからだが復活することと同じように不可能なんだって。

フリッツ それで何がお望みなんだ？

顔 わたしを自由に動けなくする家をつくってほしいの。

ウィリー いまつくってるところさ。

ゴンゾー 待ってな。

ベルが鳴り、インターバルが終わる。

聞きまちがい

をした横になった人たちが

立ち上がる。

散歩を終えたからだたちは身を密接させ、鉄棒のもとへ行き、再び石を積み上げる。立ち

上がった人たちはからだたちの道具を持ち、確認する。からだたちは立ち上がった人たちには無関心なまま、必要になった道具があれば、それが誰かの手のなかにあったとしても、それはまるで無重力空間で宙に浮いているだけだとかのようによろこびと、使用する。

立ち上がった人たちはからだたちを眺め、自分たちが見えているのか確認するために、からだたちに触れ、声を発して自分たちが誰なのかを説明する。

立ち上がった人たち わたしたち、街からやってきました。街には子どもたちがいます。子どもたちはあなたたちを怖がっています。木のすきまから見たと言っています。火で肉を焼いて笑っていた、と。先ほど、わたしたちも確認しました。子どもたちは嘘を吐いていなかったということです。しかも、わたしたちのからだを食用肉扱いしようとしたね！ だから何だ？ と開き直られますか？ 家を建てるって、コンセプトは何ですか？ 檻をまとった、ほとんど裸のあなたたちは、子どもたちを怯えさせます。外に出ないというならそれは結構な話ですが、わたしたちはそれを信じなければなりません。子どもたちは信じる信じないというより、それがどういふことなのか、わからず、怯えつづけるでしょう。あなたたちがここにおいて、肉を焼き、食べつづける限り、夜、眠る前の震えは収まりません。この入口に見張りを立ててもよろしいでしょうか。あるいは、お金を払うので、ここから出て、遠く離れたところへ行ってもらおうということはできませんか。お願ひします、わたしたちの安らかな眠りが賭けられているのです。

からだたちはひそひそ声をかけあいながら石を積みつづける。立ち上がった人たちは積み上げられた石を崩す。からだたちは石を積みあげる。その繰り返し。

ウィリー こんなことあるわけがない。

ゴンゾー 石とコンクラーベだ。

フリッツ 同情を引き出して利用しろ。

ウィリー 一瞬で終わり、もう始まらない。

ゴンゾー コンクラーベは終わらない。

フリッツ いつだってそうだ。

ウィリー セメントは使えないしな。

ゴンゾー 固まるまで時間がかかる。そのあいだにおじやんだ。
フリッツ 時間は仲間だ。

医者が仲介に入る。

医者 もうすこし慎重におしゃべりしてください。間違ったことばのひとつひとつがからだたちを混乱させます。誰かが、そうしろと言ったのですか。あなたたちがあなたたち自身でそうしようと思ったのですか。聞こえた命令が間違っているのです。こうして未来がぶち壊されます。怯えきったあなたたちではなく、子どもたちがここに来るべきです。そうすれば、あなたたち以上からだたちのやっっていることを理解するでしょう。あなたたちを安心させる可能性をここから引き出してください。そして、おかえりください。そして、未来から語りかけるべき唯一の対象である子どもたちを連れてきてください。さようなら。

立ち上がった人たちはその場に腰を下ろす。医者は男と電信で話す。

医者 オーバーワークだ、これ以上はもう勘弁してくれ。

男 何の問題もない。ほうっておけ。

医者 いつまで経っても家なんか建ちやしないじゃないか！ もう何年過ぎた！

男 家なんか建てても誰も住まない。

医者 おれも、お前も、からだたちも、顔も、みんな住むんだよ！

男 再建はそう簡単なことじゃない。家には何も帰ってこない。帰ってくるのは頭のなかだけだ。

医者 だとしたら、からだたちがかわいそうじゃないか！

男 だからお前は人間なんだ。

医者 医者だからな。人間じゃないものを人間にするのがしごとだ。

男 あれは病気じゃない。ただのことばだ。

医者 お前の言っていた無効な文句だ。聞いていてつまらない。

男 たしかにそうだ、だが、からだたちによく効く文句なんてあるのか。からだたちは売られたけんかにも無頓着に動いている。悲しんでいるのはやってきた人たちだ。

医者 このままだと血が流れる。

男 血の流れた瞬間が終わりのときだ。

医者 じゃあお前が血を流せ！

医者が白衣の胸ポケットのなかに忍ばせていたリボルバーを斜め上に構え、発砲する。銃声とともに風船が破裂する。風船のなかに隠されていたむかしの針が男の脳の中に突き刺さる。空の薄明かりが消える。からだたちは鉄棒から出て、バスドラムを踏み鳴らす。音と振動に同期するかのようになり、すべての電球が明滅する。腰を下ろした人たちは光の下へ移動する。男は眼を覆い、

闇の中

を探索する。

男 目が覚めると、足が動かなくなっていた。手と首は動く。気がつくとなんかいないようになっていた。かたわらに残ったのはマットレスが象るあなたのからだの重みだけだった。乳母車に乗って外に出るとゾンビだと言われ、半径一メートルの防護膜が張られた。道はみんなのものではなく、楽しめなかった。家に帰るとすべてのものが倒れていた。もはやわたしのものではない凍った足を一歩踏み入れると、からだは倒れてしまった。家と外のあいだにあった扉はどこに行ったのだろう。蝶番がない。穴があって壁がある。オフィスもサービスエリアも公園も線路もどこもかしこも家になった。ベッドに石膏を流しこんであなたのからだをつくったが、あなたはそんなものいらなと言った。声が聞こえるようになって、本当によかった。既製の音楽はもう何も救わなかった。耳に入ってくる音を配置する、それだけでいい。音楽を聴いたら死にたくなるからもう聴いちゃだめ、とあなたが言い置きしてくれなかったら、わたしの耳は好きな音楽ばかり貪って、危なかった。しかし、どちらでもよいということはないか。死にたくなる、生きたくないという蝶番も消えた。これはよいことか、悪いことか。どうでもいい。話が終わるときの合図だ。からだに向かういたるところで手を伸ばし、そこにあるものに触れた。あいだがどれだけ隔たっているのかよくわからない。触れているような気もするし、はるか遠くから声の残響だけが聞こえるような時さえある。距離が刻々と変化する空間にいるのか、壁に触れて空間の

程度を想像してみることはできない。寒さか暑さか、過剰な圧力が皮膚感覚をなくし、常に痺れているような感覚しか手にはない。動かすことはできるが、どう動いているのかはわからない。泣くことはできる。笑うこともできる。声を発することだってできるのに距離がとれない。あらゆるやり方で声を出してみる。自分の声が自分のからだを震わせ、あなたの声が聞こえた。どこにいる。何が起きたんだ。いま、どうしている。寒いか。熱はないか。腹は減ってないか。まわりにひとはいるのか。教えてくれ、いまずぐ飛んでいく。そんなにいつぺんに答えられない。暗くて何も見えない。わたしは家で眠っていたはずなんだけど、ここは家じゃない。わたしはコンクリートの上にいる。お尻が冷たい。あなたの声以外、何も聞こえない。声の震えから孤立した空間が伝わり、涙が出る。止まっているんだな。動かなくていい。どうして位置情報がわからないんだ！ ねえ、そんなに焦らないで。大丈夫だから。余裕をなくすのはいつもわたしの手が先だった。不安でたまらない。あなたがいなくなったら空虚がやってくる。この手はもう何もしないだろう。重たいわ。勝手にいなくならせないで。あなたの軽さがいつもわたしを救ってくれるのよ。そうだった、わたしの頭はいつもそのことを忘れて、ことを深みに落とす。でも、いったい何が起きているの？ わたし、パジャマで化粧もしてなくて、風が吹くと寒い。どうしよう。どうすればいいのかわからない。火をつけ、不安に満たされた胸から煙を吐き出す。少なくともそのときはばたばた狂った手を止める余裕があったわけだ。そこがどこか、何か目印はないのか。いつだって助けに行くことができるのに、このまま何もできないまま時間だけが過ぎていくのはたまらない。距離は絶対なのよ。そんなことはわかっていた。どれくらい離れているのか、わかるのか？ とっても遠く。触ることなんてできない。声は聞こえる。電話でもスカイプでもいまは何だってあるのよ。使いものになつていれば、孤立も少しは和らいだだろう。あなたの声は電波を介さず、空気だけを伝ってくる。だったら声のする方向を見つけて、這って、迎えにきなさいよ。わたしのからだはそれを欲し、そのようにした。顔が見つかった。

作 松原俊太郎

演劇計画Ⅱ―戯曲創作―「SF―到来しない未来」（主催 京都芸術センター）

委嘱戯曲第一稿（2017.11.01）



この作品はクリエイティブ・コモンズ表示・継承の国際ライセンスの下に提供されています。

本稿の上演・二次創作・改変・再配布について、許諾申請等は必要ありませんが、事業と戯曲創作の参考のため、京都芸術センター（e-mail: info@kac.or.jp）までご連絡ください。報いただければ幸いです。

※なお、H30年に発表予定の決定稿については著作者に断りのない使用・改変・再配布を禁ずるかたちでの発表を予定しています。